

ギリシア人の自然観

ギリシア人の自然観をよりよく理解するため、まずギリシア人が、自然を始め、対象一般に対して、どういふものの見方をとったかということ述べたいと思う。

いづれの民族もそうであったが、ギリシア人は初め、全存在（パンタ・タ・オンタ）、宇宙（コスモス）の中の一部として生きていた。とはいえ、彼らはコスモスを見る時、同時にコスモスに對して（エピ）目を向けた（ヒステーミ）のである。¹⁾この宇宙は、いろいろと変転極まりなく、多様であるが、一体これらは何であるのか（ti estin）とギリシア人は問うた。

この何であるのか、ティ・エスティンという問いのあり方こそ、まさにギリシア的・ヨーロッパ的なのである。日本人も「それは何か」と問うた。しかし、その問いは個別的なものにかかわり、それを超えて、その奥へと吟味の眼指しを向けることがなかった。

向坂 寛

つまり、日本人の場合、対象を対象たらしめている本質や原質にまで踏みこんで問うことをしなかった。言ってみれば存在論的ではなかったのである。

ギリシア人は、現象は多様だが、その多様性に目を奪われず、多様さを統一し、秩序づけている根源的なものがあるはずである、それは何かと問うたのである。この本質への問いこそ、彼らのティ・エスティンの中味なのである。彼らは多様性の奥にある本質、原質（ousia）、始源（arche）を客観的、原理的に理解しない限り安心できないという発想をもっていたのである。

単に名称を問うだけではなく、現象の奥の原理、原質を抜き出し、手に入れることなのである。彼らの見る（theoria）は理論（theoria）となつて結晶するような見るなのである。見るというコトバの別のギリシア語イデアイン（idein）も観念（idea）となる

ような見るなのである。

ではなぜ彼らは個別的相の奥にある本質、原質を問わねばおさまらなかつたのか。

ケルゼンによると、人間は自然と交感する前にまず人間社会の中で交感する、そこで習性となったものの見方が対象一般の認識の中に投影されるという。人間社会の中で培われたそのような主観的フィルターをもって、人間社会から自然世界へと目を向けて行くのである⁽²⁾。

プラトンも『テアイテトス』の中で、認識の成立に、一方ではこの主観的フィルターと、他方では対象から発するエネルギーとの波長が合う⁽³⁾ことの必要性を述べている。つまり、個別相の奥に原理、原質を求め、しかも正確に客観に即して取り出すとする彼らの客観的見方は、皮肉な言い方であるが、まさに彼らの主観的フィルターであるということである。この客観的なものの見方をする主観的フィルターは、地続きの侵略、虐殺を繰り返す彼らの環境と混血族としてのシビアーな宿命に根ざしている。彼らは遠矢を射る透徹したアポロンの眼が必要であったのである。

まず、自分の前方に（エピ）、対象を据え（ヒステミー）、遠くからコトバをかけ、相手のにこやかな笑みは嘘ではないか、微笑の奥に悪意はないかと相手の本質を見極め、知ろうとするのである。彼らの知るは対象的に吟味して知るエピステミー^(epistēmē)

なのである。そうしなければ身が危険なのである。こうして、相手の人となりをも、また人間の本質をも、またものをものたらしめている原理や原質を、その根っこにおいてきちんとつかまえようとしたのである。デモクリトスは、「ペルシア帝国を手に入れるより、むしろ一原理を発見したい」と言った。この願望の裏には、ものごとには必ずその奥に、それらを統一し、支配している原理が必ずある筈であるという、骨組み、筋道、ロゴスへの信念があったのである。つまり、そうした秩序づける鍵をまず手にしたいという主観的フィルターが投影しているのである。従って、宇宙には必ずや秩序づける（コスメオー）何かがあり、またある筈であるとし、それによって秩序づけられたもの（コスモス）が宇宙なのであった。

ヘロドトスはアフリカを旅していて、ナイル河の源はどのあたりに発しているかに思いをいたした時、それは必ずやタニユーブ河の源と対蹠的位置にある筈であると考えた。タニユーブ河の河口とナイル河の河口とは地中海で相対し、各々反対方向に河流がのびているからである⁽⁵⁾。もし神々が幾何学的にこのコスモスを作ったとするなら（これはプラトンの信念でもあった）、理屈からそうなる筈だと彼は考えたのである。たとえ、この答えが不正確であるにせよ、ここにギリシア人の自然に対するものの見方、発想、主観的フィルターが色濃く出ていると言えよう。つまり、自然的世界には一つの原理、ロゴスがあるという信念である。

さて、以上のような前置きを念頭に置いて頂き、ギリシア人の自然観の特質を、そのほかいくつか挙げてみたい。

前述したように、ギリシア人にとって、初めは人間は宇宙の一部であったが、「独自の原理を内にもつ人間」の自覚と共に、自己と対立する自然の世界が意識されてきた。それは大体ソフィストの活動期(前五世紀)あたりからである。それまで宇宙の原理、原質をピュシス(ネイチャーの語源)と彼らは言ったのである。タレスはこのピュシスを「水」と言い、アナクシメネスは「空気」と言い、ピュシスはアルケー(始元)と同じような意味をもっていた。「水」といい、「空気」といい、これは彼らには宇宙の素材でもあり、宇宙を秩序づける原理でもあった。⁽⁶⁾

ソフィスト以後、人間と対立する自然の世界に、同じく「ピュシス」というコトバがあてられ、それは原理、原質の意味と重なり合って用いられた。従って自然的世界にはコスモスを秩序づける統一原理やロゴスが支配しているという考えを一貫して彼らもっていた。

さらに、自然的世界は独自の原理をもつ人間の自覚の下に誕生したわけであるから、自然は人間や人為と対立する世界であるという彼らの自然観の一つがおのずから露になるわけである。人間の肉体や肉体的欲望は、自然の世界と連続しているわけであるが、この肉体的欲望という自然的馱馬が、常に理性という魂の御者に反抗し、鞭うたれ、対立している姿をわれわれは『パイドロス』

の中に見ることが出来る。⁽⁷⁾ また、人間の理性は弱者をかばう傾向をもっているが、自然的世界は弱者を呑みこむ苛酷な世界であると彼らは考える。日本人にとっても、人為と自然とは厳しく対立し、むしろ、人為を排した自然に日本人は価値を置く。しかし、ギリシア人は、人為と自然は対立すると同時に究極においては和合、調和するのだという考えを併せもっていた点が異なっている。アリストテレスは「人間はピュシスにおいて、ポリスの動物である」と言っている。⁽⁸⁾ 人間が国家を形成するのも自然的本性であるというわけである。ここでは人為と自然の調停が試みられていると言えよう。ここに、ピュシスの初期の意味である、コスモスを秩序づける原理的なのが、包括的なあり方で息を吹き返しているようにも思える。彼は「人為(テクネー)は自然が仕上げることができなかつたものを仕上げる」とも言っており、人為と自然が必ずしも対立しないことを述べている。これは日本人の自然観にはない特質の一つである。

次に自然は、自然自体の中においても、事物相互に対立し、調和すると彼らは考えていた。ヘラクレイトスは「戦は万物の父である」⁽¹⁰⁾ と言って、矛盾闘争を存在の根本に据え、しかもその戦のバランスの中に、真の和合を見たのである。同じ彼の断片の中で「火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生きる」⁽¹¹⁾ と言っている。かくして全体の秩序は「いつも生きている火として、きまっただけ燃え、きまっただけ消えながら」⁽¹²⁾ とも言う。

自然界の弱肉強食の動物たちの姿も、それなりにバランスがとれているとみる。

植物の世界も同じである。「木々の葉の世のさまこそ、人の世のならい。風が木々の葉を地上に吹き散らすかと思えば、森はほかの葉を繁らせ、春の季節がめぐりくるのだ⁽¹³⁾」とホメロスは歌い、木々の葉もきまっただけ散り、それを堆肥として、きまっただけ繁り続けるのである。

ギリシア人の自然界を見る眼指しは、できる限り客観に即しながら、そこに法則性をみようとする。狼は狼としての本性を、小羊は小羊としての本性を正確にとらえる。イソップ物語は、自然界の掟を正確に描写し、どんなに言い訳をしても、狼と小羊が出逢えば、小羊は狼の犠牲になるものだという教訓を人々に教える⁽¹⁴⁾。足柄山の金太郎の物語における、狼や熊や兎が一堂に会し、仲良くスモウをとるとする日本人の主観的フィルターは、ギリシア人には考えられないことである。

最後に自然は必然性をもっているという考え方をあげることが出来る。これは自然に法則性や原理があるということと重なる面があるが、自然をむしろ、予測できない偶然性として理解する日本人には異質のものかもしれない。「明日ありと思ふ心の仇様、夜半に風の吹かぬものは」は、日本人の自然は予測できないとみる見方を表わしている。ギリシア人には、嵐も洪水も予測できる筈のものである。

「太陽は距を越えないであろう。越せばディケエーの女神の助力者たるエリニユス(復讐の女神)が彼を見つけ出すだろうから」⁽¹⁵⁾とヘラクレイトスは言う。彼らは自然界には必然の法則ががっちり支配していると考えている。この考えは、自然の中にロゴスが貫かれているという信念と結びついて、近代的「自然法則」の觀念へと連結されていくものであろう。

以上、ギリシア人の自然観を、特に日本人のものと異質と考えられる点に限って述べてみた。紙数の余裕があれば、日本人の自然観と比較し、最近やかましく取沙汰されている自然破壊、環境汚染の問題とからめて論じてみたかったが、これは別誌で述べたいと思う。

- (1) エウクテーム (epistēmē) とは知ること、ギリシア語 epistēmō。
- (2) H. Kelsen, What is Justice? - Collected Essays - University of California Press, 1957. 宮崎他訳『正義とは何か』木鐸社。
- (3) Plato, Theaetetus 156 C~E, O.C.T. フラトン・田中訳『テアイテトス』岩波文庫。
- (4) Diels, Die Fragmente der Vorsokratiker, Demokritos, DK, 68
- (5) Herodotus, Historiae II, 33, O. C. T. クロウツス・松平訳『歴史』岩波文庫。
- (6) Diels, Die Fragmente der Vorsokratiker, Tales, Anaximenes.
- (7) Plato, Phaedrus 246 B, O.C.T. フラトン・藤沢訳『パイドロス』岩波書店。
- (8) Aristotle, Politica 1253 A, アリストテレス・山本訳『政治学』岩波文庫。

- (6) Aristotle, *Physica* 199 A, アリストテレス・中『岩崎訳『自然学』岩崎書店。
- (10) Diels, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Herakleitos, DK.53
- (11) *Ibid.*, DK. 76
- (21) *Ibid.*, DK. 30
- (31) Homer, *Ilias*, VI 145, 呉訳『ホメーロス』世界文学大系・筑摩書房。
- (41) *Esopé fables*, 221, *texte établi et traduit par E. Chambry.*
- (51) Diels, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Herakleitos, DK.

94

(ちきちか・ゆたか、ギリシア哲学、日本大学教授)